

---

# クリスマスの奇跡

北冬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマスの奇跡

### 【Zコード】

Z3406B

### 【作者名】

北冬

### 【あらすじ】

沖縄にいってしまった彼女を追いかけず、ツリーのまえに呆然と立つ男が、自分との葛藤を終え、今、彼女を追いかける。

## 第一章「始まりの物語（トキ）」（前編）

この物語が、読者の心に届けたいなと想こま。アーティスト、応援の声、みんなの願いします。

## 第一章「始まりの時間（トキ）」

12月24日

クリスマスイブ

今夜も明るく照らされた町、東京。

様々なイルミネーションが明滅しながら、光輝いている。

さながら、ライトアップされた宝石店のようだ。

イルミネーションが立ち並ぶ並木道を歩いていくと、大きな広場に突き当たる。そこには、20メートルはあるであろう、クリスマスツリーと、何組ものカップルがその夜を照らしている。

僕は今、クリスマスツリーの前で、呆然と立ち尽くしている。

隣にはだれも居ない。さつきまでいたのだが。

右の頬が熱い。なぜ、熱いのか解らなかつた。いや、解りたくないのだろう。

「ごめんな……」

痛みを紛らわすために、誰もいない隣に、謝つた。

：痛みが増しただけだつた。

周りのカップル達が、指を指しながら何事か囁いている。

まあ、当然だろう。さつきまで一緒にいた人が、怒声を上げて、どこかへ行けば。

カップル達にじろじろみられていても、立ち去る気にならなかつた。というより、視界に入らなかつたから、氣にもならなかつたのだ。それに、体が動かない。

今になつて、悲しみの金縛りが掛かりはじめた。

悲しみは慰めという言葉を知らないかのように、深く、胸をえぐつた。

「…………」

肩を震わせながら、涙の一粒が零れ落ちた。ひらひら舞う灰色の粉雪が積もつた地面を薄く溶かした。

周りの同情という空気が、より一層濃くなつた。

居たたまれなくなつたのもある。

ただ、それだけじゃない。

「まだ、間に合う」

心の中のなにかがそう呟いた。

走り出した。泣きながら。

そうだ、まだ間に合う。

那覇空港行きの便は、8時発だ。

ここから、羽田空港まで、近くの駅に乗れば行けるはずだ。そうすれば、彼女居る。きっと。

今から行けば間に合う。

クリスマスツリーに来た道とは真逆の方向に走り出した。並木道を駆け抜ける。人が多いせいか、途中、何度も肩がぶつかった。謝る暇はない。肩がぶつかる度に怒鳴られたり、舌打ちされた。それでも、止まらない。いや、止まれない。

遠くで大通りが見えた。

多分、日光街道だろう。

そして僕は。

ただ、走る。

並木道から抜け出し、近くの自転車を停めた公園に向かう。カチヤという鈍い音を立てて鍵が開いた。

立ち止まらない。全速力で自転車のペダルを廻した。自分でも、もの凄いスピードを出してるのが分かる。彼は、駅まで全速力を出した。必死でベルを鳴らしながら走る。

## 第一章 「決意と決行」（前書き）

これより先に、地名などを表現するところがあり、著作権法などに係らないように地名の名を変えている場合が御座いますので、予め、御了承下さい。

## 第一章「決意と決行」

駅には、6時47分に着いた。

切符を買い、駅のフォームに、滑りこむ。

時刻表の電光掲示板には、

「6時50分、普通、羽田空港行き」

と刻んである。

これに乗つて行けば、たどり着くはずだ。

ただ……。

間に合うのか……？

羽田空港までに行ける時刻などは、特に頭に入れていなかった。まさかこうなるとは、思つてなかつたから。いまさらながら、時刻表とかを買っておけば良かつたと思った。絶対、買わないけど。

一瞬、間に合わなかつた時の事を考えた。

そうすると、不思議と潮が引いていくように、熱が冷めていく。

「そうだよ、なんでこんな急いでるんだ？意味ないじゃないか。また、別の人を探せばいいだろうに。」

「違う！」

心の中の悪魔を振り払つた。

もう、迷わない。

心の中で、彼は深く、本当に深く、刻みこんだ。

電車が、闇を切り裂いて迫つてくる。

電車内は、混んでいた。クリスマス・イブで、帰郷する人が大半を占めているのだろう。

凄く狭い。

体も……、心も……。

7時41分に、羽田空港駅に着いた。

時間は走れば、まだ間に合つはずだ。

彼は全速力で、羽田空港第一ターミナルへ向かう階段を駆け上がつた。間に合わなかつた……。

いや、後ろ姿に叫べただけでも間に合つたと、言えるだろう……。

彼女はすでに入場ゲートで荷物検査をしていた。

叫んだ。違うかもしれないのに。反応はない……。

もう一度叫んだ。確実に彼女に聞こえただろう。何人もの人が振り向いたから。

でも、彼女は振り向いてくれなかつた。ただ、彼女が一瞬笑つたようを感じたのは気のせいなのか……

「……バカ……だよな……」

彼は心の中で、そう自分を責めた。

そうだよ、振り向く筈がない。あんな事言えば、傷つくなは解つていたのに……。

『ごめん……、やつぱり行けないよ。今を捨てられない。』

すべてを消し去つた一言が頭に浮かんだ。

あのとき、ついて行けば良かつたんだ。後悔先に立たずとはこのことだな、と笑つた。強がりだ。

また涙と共に、軽いおえつが、零れ落ちた。数人が振り向き、すぐ別の方を向いた。

悔しかつた。悲しかつた。

そうだよ、僕は彼女がいなきや、何もできないんだ。

心の中のどこかが弾け飛ぶ音がした。

彼女の居ない、毎日を考えたら。

：：：追いかけよう。もう、先のことは考えない。そうだ、彼女を追う

んだ。

自分に負けられなかつた。

そうだ、戦うんだ。こんな風に、熱くなつたのはいつだつただろうか…。

「さて……。」

彼女が行くところは解つていたのが唯一の救いだつた。

あちらでの生活に馴染むために色々な所を観光すると言つていたのを覚えている。

なら、片端から、観光地を廻るだけだ。

沖縄の観光地で有名と言えば、

「首里山城」

「沖縄美海水族館」

「しらゆりの塔」

くらいか…。

あと、千座毛とかいう所にいきたいとかいつていたから、そこに行く可能性もある。

「兎に角、明日に備えて、早く帰るわ。」

彼は、羽田空港第一ターミナルの出発ロビーから、外に出た。外はクリスマス・イブの風に吹かれて、雪が綺麗に踊つていた。イブの奇跡…

そんな言葉がよく似合つ美しさだつた。

空は、まだ少し明るい。

待つてろよ。いや、彼女は待つてないかも知れない。

でも、追いかける。ほかでもない、自分のために……。

そつそ、自分のために……行くんだ。

「由紀

の…、僕の大好きな女の子に、会いに……。

彼は、

「優太」

は、雪の絨毯を踏みしめて、駅へと向かつた。腕時計は、午後10

時を刻んでいた。

「そうさ、すべては、

明日だ

優太は呟いた。

## 第三章「沖縄へ…」

12月25日

午前6時10分

「6時15、羽田発那覇着、ANA991便をお乗りのお客様は至急、59番ゲートにお越しください。」

早朝の静けさを破る場内アナウンス。

外はまだ薄暗い。月明かりも、星すらない朝の闇。

出発ロビーのソファーに身を沈めていた優太は、飛び起きた。ついに来た。沖縄に行く日が。

興奮を抑えきれず、ソファーから立ち上がり、思わず叫ぶ。「ごほん！」

ロビーで、見回りをしている警備員に、わざとらしい咳をされ、すいませんと頭を下げる。ちょっと情けないと優太は思った。

「あはは」

誰かが、笑い声をあげている。

もう一度警備員が、わざとらしい咳をした。

だが、その人は、警備員を一瞥して近付いてきた。すごくデカい…

「相変わらず、その叫ぶ癒治んなのな。」

やや、しゃがれた声の、同年代の男が、大仰に肩をすくめて話かけてきた。

「あ…」

よお、と軽く手を挙げて、挨拶をしてきた。

「正紀…」

正紀は、高校時代の親友だ。違う大学に行ってから、あまり連絡をとらなかつたが、こんなところで逢うとは思わなかつた。

「ひさしごりだな優太！由紀ちゃん、元気か？」

正紀はそう言って、あたりを見回した。

「あれ？由紀ちゃんは一緒じゃないのか？」

「実は…」

あまり話したくなかったが、話さない訳にも行かない。

「…なるほどね。それで、今から沖縄行くわけか…」

正紀は、いつになく神妙な顔つきで、言った。

優太は、黙つて頷いた。

「6時15分、羽田発那覇行き、ANA991便にご搭乗のお客様は至急、59番ゲートに、お越しください。」

時刻は12分を廻っていた。

「やべ！」

優太は急いで59番ゲートに急いだ。正紀も急ぐ。

「あれ？正紀も沖縄いくの？」

「まあな。実家が沖縄でよお。あつちで年越すんだよ。」

「ああ、そういうえば、沖縄が実家とか言ってたな。

二人は、大急ぎで、飛行機に乗りこんだ。

ぐんぐん陸から遠ざかっている。東京の街並みが、遙か下だ。東京は、灰色の暗い空に反応できていないかのように、ポツポツとしか、灯りが点つていなかつた。

気温は氷点下58度。鳥も凍りそうだ。

そんなことを知つてか知らずか優太は、朝早く起きて、寝不足の疲労をとるべく、眠りに就こうとしていた。

騒がしい正紀は席が離れているため、着くまでは、静かだろう。

東京の摩天楼達を見下ろしながら、ゆっくり暗闇の世界に漫かっていった。

## 第四章「沖縄県」

軽い振動と共に、キュルという着地音が響いた。那覇空港に着いたのだ。

空は、闇を消し去った太陽が浮かんで、微笑んでいた。コバルトブルーの青空。綿飴が、空に浮かんでいる。

「ふ」

優太は、大きく深呼吸をした。着いたのだ。沖縄に。優太はシートベルトを外し、人の波に乗った。

CAが、ひきりなしに、微笑んでいる。優太は、

「どうも」

といつよつに軽く頭を下げ、機内から那覇空港内に降り立つた。

「あ〜、疲れたあ。」

少し遅れて、正紀が搭乗口から出でくる。疲れたと言つてはいる割には顔がすがすがしい。

那覇空港内は、まだ9時だというのに、賑やかだった。

空港内は意外と広く、待合室にテレビが何台も置いてあつた。それにクリスマスということもあり、ツリーなどが飾つてある。この小さな島の、どこかに…由紀は語る。そう思ふと、胸が高鳴つた。

「お〜い！優太！」

正紀が左の曲がり角で、手招いている。

搭乗口から、道なりに歩いて、1階の到着ロビーへと向かい、手荷物のバックを取つて、とりあえず外に出た。

沖縄の気候は、やはり南の島なだけあり、12月だというのに、暖かかった。

「沖縄の12月は、平均18度らしい。」

正紀が何気ないうんちくを言つて、立体駐車場らしき所に歩いてい

く。

立体駐車場は2つあり、その間に挟まれたように那覇空港駅があつた。

僕は正紀と別れて、レンタカーを借りるつもりだった。正紀は、実家に帰るだろう。

迷惑はかけられない。

「じゃ、正紀。ここで別れよ。」

すると、正紀は残念そうな顔をして、「そうか…、お前と久しぶりに逢ったし、観光でもしたかったんだけどな。」

「一緒に観光でもしたかったんだけどな？」

実家に帰るんじゃなかつたのか？

「ま、まてよ！ やつぱ一緒に行く。」

正紀は、最初からこうぐることが解っていたかのよう、一矢口と笑つた。

「やうかやうか！ やつぱり、持つべきもんは、友達だな。」

僕は、こいつ、と思つた。

最初からこうなることを解つてやがつた。

長いつきあいだと、相手の考えがよく解つてくれる。

僕は、思わず吹き出してしまつた。

それに合わせて、正紀も笑い出す。

そして僕達は、立体駐車場に向かつた。

## 第五章「首里山城にて」

正紀の車は、シルバーの大型のワゴンだった。  
ずっと停めてるらしい。

料金とか大丈夫なのか…？

ふと僕は思った。

そんな考えはお構いなしに、正紀は、

「乗れよ」

と手を招いている。

無言で僕は助手席に乗り込んだ。  
エンジンがかかる。車が心地よい振動を出した。

その心地よさとは裏腹に、正紀の運転は、まるで猪のようだ。

「うわっ！」

僕がかるく悲鳴をあげると、正紀は、

「悪い悪い

と言つた。

ほんとに悪いと思つてゐるのか？

心の中で、僕は正紀を睨みつけた。

なんとなく、先行きが不安になる。

「とりあえず、首里山城に向かつてもらえる？」

僕は言つた。

「ああ、OK！」

正紀は上機嫌だ。

呑気に鼻歌を歌つている。

ワゴンは、エンジン音を上げて、立体駐車場を後にした。

「着いたあ…」

首里山城は、壯觀だつた。朱に染まつた豪華な裝飾が施された正面玄関。焦げ茶色の静かに佇む屋根。口の字型の立派な建物だつた。

ただ、ここまで歩く道がかなり長い。

駐車場から少し歩くと、緩やかな坂道が連續し、途中で守礼の門をはさんだ長い道のり。

高齢者的人はキツいだろうな、と優太は心の中で思つた。ただ、あいつは違う。

ガキみたいに駆けずり回つて、ガキみたいに喜んでいた。

「ほら！ みるよ！ 首里山城だぜえ！」

他の観光客がじろじろ見ている。

多分、自分の顔を見ないと解らないが、かなり赤くなつてていることだろう。

正紀は、散々はしゃいだ後、疲れたのか殆ど喋らなかつた。兎に角、由紀を探そう。観光をしている暇はなかつた。

片つ端から探した。間違いなく隅から隅まで探したつもりだ。でも…見つからなかつた。

ここには居なかつた。

「はあ…」

僕は、深いため息をついた。

急に腹が暴れ出す。

「なにしけた顔してんだよ」

正紀が何気なくベンチの隣りに座つてきた。

「…腹減つた。」

僕はぼけつと首里山城を見上げながらぼやいた。

「腹減つた？ ジャあ、食いに行くか。近くの飯屋にでも。」

そう言つて正紀が立ち上がつた。

正紀に倣い、僕も立ち上がる。

こうして、僕達は首里山城を後にした。

ただ、あのときは気付かなかつただけだ。

彼女と同じ、空の色に溶けそうな白のワンピースと、彼女と同じ、黒い長髪の人気が居たことに。

その人とすれ違つたことに。

優太は、ふと腕時計を見た。時刻は、11時を刻んでいた。

## 第六章「料亭にて」

…彼女が…居た。

…彼女が…泣いていた。

潮風に、長い髪が、たなびいていた…

僕達は、正紀のお薦めといつて、首里城近くの

「首里そば邸」

という飯処に寄つた。

12時という昼時なのに比較的に空いていて、すぐ食べられたのが救いだつた。

なにせ、急ぎの旅だ。

「うまいだろ、ソーキソバ。」

近くの土産屋で買った、

「さーたあんだぎー」

をかじり、僕に箸を突きつけながら、正紀が言つた。

「うん」

僕は頷いた。

確かに、旨い。

ソーキソバは、そばといつ割には、うどんに近かつた。

トッピングにかまぼこちらしきものと、豚の骨付き角煮が入つていて。そうかそうかというように、正紀が頭をぶんぶん振り、またさーたあんだぎーに挑み始めた。

そのとき、ちょうど観光を終えたのか、団体客が狭い店内に入り、店内を埋め尽くしていく。少し暑くなつたように感じた。

ここを出たのは、午後1時だった。

雨が、優太を慰めるように降っている。もしかしたら、神様の叱咤激励かもしれない。

つぎに向かう所は、しらゆりの塔だ。

なんとなく、胸が痛くなつた。

しらゆりの塔は、戦死者達の慰靈碑だ。聞いたことはある。よく社会の教科書に出ていた。

胸が痛んだのは、行くことが苦痛なかもしれない。  
だが、それだけじゃない…。

そんな気がした。

けど、そんなことも言つていられない。彼女に逢いたい…、その気持ちは抑えられなかつた。

一刻も早く…

「正紀、次はしらゆりの塔に頼む。」

「…………ああ」

しらゆりの塔と聞くと、心なしか正紀は元氣がないように感じた。  
さつきまで元気だったのだが。

車は、鈍いエンジン音を立てて、ゆっくり、走り出した。

## 第七章「しらゆりの塔」

車は30分ほどHンジンを鳴らせ、しらゆりの塔に着いた。駐車場から、しらゆりの塔までは、それ遠くなかった。

「…………」

神聖だと、どこか淋しさを香らせぬ…

ここに着いて、最初に思ったことだ。

そりやう風に思つたのは…

そう…

しらゆりの塔は、喧騒に包まれながらも、決して表情を変えなかつたからかもしねり。

何個もの防空壕の穴。そして、それを見守るかのように作られた慰靈碑。

すご〜く…怖い。

戦時中の人々が、必死で逃げまどつていた跡地。

正紀も、はしゃいでいなかつた。

悲しそうに、眉をひそめながら、防空壕の穴を見つめていた。

寒い。ここだけは。雨が降つているせいかもしねり。

だが、他の世界から隔絶された場所、それがしらゆりの塔だつた。

「なあ…優太」

突然、正紀が話しかけてきた。

「なんだよ?」

慰靈碑を見ていた優太が振り返る。

「…………俺の曾祖母ちゃんてや、ここで死んだんだって。」

少し、悲しそうな顔をして、正紀は防空壕の穴を見つめながら言つた。

「そりやうだ…」

僕も彼と共に穴を見つめ、顔をつづむけた。

「曾祖父ちゃんは曾祖母ちゃんを守ろうとしたらしきけど、逃げた

んだとよ。先を考えたら怖くなつたらし。」

「…………」

「情けない話だよな。」

僕は黙つて首を振つた。

「でもよ……ずっと、曾祖父ちゃんは後悔してた。あのとき逃げなきや良かったって」

「…………」

「……だからよ、おまえだけは後悔しないで欲しいんだ。逃げないで欲しい。おまえの初恋の人、だろ？ 追いかけるよ……。」

言葉が出なかつた。いや、言葉は出さない方がいい……。

正紀が、こんな風に無表情で何かを言つたのは初めてだつた。

思わず、胸が熱くなつた。

「……追いかけるよ。」

もう一度、正紀は繰り返した。

テープのよう。テープのよう。

「ああ……」

僕は言つた。

正紀は、頑張れよと言つよう親指を立て、薄く微笑んだ。そして再び、穴に吸い込まれていく。

僕はその場から離れ、ひめゆりの塔を見回した。

目の前には慰靈碑。そして、慰靈碑の左側に平和記念館があつた。ガイドや観光客がひしめくなか、僕は必死で探した。

慰靈碑の広場……

平和記念館内……

どこを探してもいなかつた。

「なんでだよ……」

僕はそんな言葉と共に、深い溜め息をついた。

ただ、絶望は追いかけてこなかつた。

追いかけているのは、僕だから。

《迷うな》

僕のなかでこれは、この決意は確立していた。  
迷わないんだ。」  
言葉が反響した。

## 第八章「遂に」

優太は地図を指でなぞりながら、眉間に皺を寄せていた。  
ひめゆりの塔から、沖縄美海水族館の道のりを見ていた。

「遠いなあ……」

優太は呟いた。

優太達はしらゆりの塔向かいの

「優琵堂」

の飲食コーナーに居る。

この寒いのに…雨が降つてゐるのに…正紀はさとうきびアイスを食べ  
ている。

とても嬉しそうだ。

地図を眺めていると、水族館への通り道に千座毛があつた。なら、  
千座毛から行つたほうがいい。

「正紀、次は千座毛を頼む。」

正紀は、アイスの食べかすを付けた顔で黙つて頷いた。

優太達は、それから無言で立ち上がり、歩き出した。

千座毛へは、車で1時間程で着くだろう。

優太達が車に乗り込むと、さつきまで降つていた雨がやみ、眩しい  
太陽が、顔を出した。

視界がぼやける。

頭は、霧がかかつたよつにともやもやしていた。

「…………」

遂に見つけた。彼女を。

「着いたぞ。」

「うわ！」

誰かの声で、夢から離脱した。  
正紀が訝しんでいる。

「夢か…」

それに、同じ夢を2度も…

一度目は… そう、あの料亭でだ。  
外を眺めると、駐車場だった。

駐車場の奥に、南の島特有の林が広がっている。沖縄にきて、幾度となく見かけた木々だった。

千座毛は、観光ルートにある崖から見える岬が、象の鼻のように見える事から、そう呼ばれていた。優太は（正紀は高所恐怖症という事でついてきていなかった）駐車場から、先ほどの林の中を突き進み、道を歩くこと5分。

「え……。」

… 彼女は居た…

… 泣いていた…

潮風に髪がたなびいていた。

あの時のままの… 彼女が居た。

## 第九章「本音」

「あ……。」

声がうまく出ない。先程、車の中で見た夢と全く変わらなかつた。ただ、夢の中はどこかの海辺だつたが。

「由紀……」

必死で声を絞り出した。

彼女がゆっくりと振り返る。

時刻は、4時を廻つていた。

沈み始めた夕焼けが彼女を照らしている。

静寂。

まるで誰もいないような。

いや、うるさい筈だつた。

観光客の声と、波の音で。しかし、耳に入つてこない。

「……！」

彼女は僕が唐突に現れたことで、目が驚愕に見開かれている。

「由紀……」

のばしかけた手が、行き場をなくした。由紀が走り出したからだ。いや、逃げ出したと言つたほうが正しいか。

「まつて！！」

行き場がなくなつた手に力が入り、思わず腕を掴んだ。が、振り払われた。

「由紀！！」

追いかけた。

由紀は、ワンピースを着ている。

走りやすいとは言えないだろう。

それも、歩きやすい道ではなく、雑然と広がる密林のなかだ。

すぐに追いつき、もう一度腕を掴んだ。今度は、先程より強く…。

彼女が、僕を睨んだ。

あの時の目だつた。

「……なんで？」

由紀が胸に染み渡る声で呟いた。

「え……？」

一瞬、時が止まつたように感じた。

「なんで来たの？」

彼女は、明らかに、怒つてゐる。

声が、それを語つていた。

ただ、憎しみのそれとは違つたが。

「……逢いたかつたから。雪に。」

何も考えなかつた。口から口を紡ぐように言葉がついて出た。

彼女の顔が霞む。

目尻が熱くなつた。

「……バカ」

彼女は泣き崩れた。嬉し泣きなのか、悲しくて泣いてゐるのかは、解らない。ただ、僕を拒絶してゐる訳ではない。

そんな気がした。

「諦めてたのに。忘れようとしたのに……なのに、どうして……。」

彼女の小さな唇が、本当に小さく開いた。

彼女の声は嬉しさに震えている……。

そう感じた。

「……」

僕は黙つて、彼女を抱きしめた。

数人の観光客が、遠目で、こぢらを見るだろう。ただ、気にならなかつた。

彼女の嗚咽が、一層酷くなつた。

僕は、ただただ、彼女を抱きしめていた。

## 第十章「迷い…そして。」

優太は今、沖縄美海水族館に居る。

彼女に連れてこられて…。

ただ、彼女は居ない。

彼女は泣きながら、走つていってしまった。

「…………」

絶望だった。

まさか……。

正紀も、もう居ない。

彼は優太達をここに送つて、実家に帰つていった。

彼なりに気を使つたのだろう。

今、僕は一人ぼっちだつた…。

そして今、究極の選択をしている。

彼女か…人生か…

大半の人は人生を取るだろう。

多分、昨日の僕だつたら、後者を選んでいた筈だ。

ただ、今は昨日と状況も自分も違う。

彼女は、多分海辺にいるだろう。

それだけは解つていた。

何度もなく、夢にでてきたからだ。

優太の頭の中は、4文字の塊が堂々巡りしていた。

政略結婚……。

彼女と最高の時を過ごしていた優太に絶望を齎した暗黒。

そう、これを抜け出すには、駆け落ちという名の4文字で対抗するしかなかつた。

多分、今では殆どないことだろう。

駆け落ちなんて有り得ないと、優太自身思つていた。

ただ、こうやって現実を突きつけられている。

駆け落ち……つまりそれは、全てが、彼女かということだ。

「まさか……、そのまさかだな……。ドラマみたいな展開になっちゃつたよ……」

一人で皮肉りながら、笑った。強がりだ。

僕の腹は、決まっている……筈だった。

沖縄には、日本円を海外の金にできる所もあるし、国際線の空港もある。幸い、バイトで貯めた金が100万程ある。それに、去年彼女と共に、外国へいったからVISAはまだ有効だろう。

この金で駆け落ちを、海外に行くしかない。

日本では直ぐ見つかってしまうだろう。

だけど……

優太の頭は、恐怖と迷いで震えていた。普通は迷うだろう。色々な糸をすべて断ち切るのだから……。

「…………」

優太の心の中が、戦争をしている。

あの時、誓った決意が揺らいだ。

迷うな……。

諦めるな……。

自分を必死で励ます。

「行こう」

優太は、ベンチから立ち上がった。

水族館を見回すと、幸せそうなカップル達が目に入った。多分、優太は目を羨ましそうに、細めていただろう。

優太は心が絶望に走る前に闘うか、逃げるかの決心をつけるため、

「彼女の所に向かおう」

と、呟いて海辺へ向かつた。

## 最終章「わがまま」

沖縄美海水族館は、海洋博記念公園の中にある。

記念公園には、色々なレジャー施設があり、その一部にビーチがあるのだった。

そこに居るはずだった。

……やつぱり居た。

彼女は泣いていた。

潮風に髪がたなびいている。

そう、いつか見た景色。

「ゆ……」

一瞬止まつた。

優太が彼女を呼ぶ前に、彼女から近づいてきた。

戸惑つた。彼女の顔が、余りにも憂いに満ちていたから。

彼女は顔を近付けて、唇を当ててきた。

生まれて初めて、彼女と唇が重なつた。離れた後の彼女の顔を見る

と、胸が痛んだ。

「ありがとう……、最後に、あなたとここへこれて良かつた。優太、

バイバイ

彼女は手を振つていない。

涙が、手を振つていた。

もうすでに、10時を廻つている。

彼女は月明かりに照らされて、輝いていた。

後ろ姿さえも……。

すべてが……、伝わってきた。その……背中から……。

優太の中で、追いかけようと決意したあの時のように、何かが弾け

飛んだ。

そうだ、なんで迷つてんだろ？

『おいかけろよ』

正紀の声が響いた。

「まつて！」

僕は叫んだ。

叫びと共に、一陣の柔らかい風が吹く。

彼女が振り向いた。信じられないほど綺麗だった。すべてが。

「「めん、ずっと、ずっと！沖縄にきてから、ずっと迷つてた。今、答えが出たんだ。…由紀」

彼女が、振り向く。切なそう。

「俺の、わがまま聞いてくれる？」

由紀が目を開じて、ゆっくり頷く。

「なに？聞いてあげるよ。」

僕達は今、オーストラリアに居る。

静かに、酪農を営みながらの、生活を送っている。予想はついていると思う。

そう、それが、俺のわがまま。

去年、子供が生まれた。双子の男の子だった。

今日は、クリスマス。

僕と雪と子供達で、静かに、いや、賑やかに、盛大に祝つている。空は、花びらが舞うように、儂く、美しい雪が踊つている。地面は、その雪が延々と続く草原に薄く積もり、綺麗な薄い青空の色を映し出している。

夜の帳に散りばめられた星が、クリスマスという星を祝福していた。

今日は、クリスマス。

今という幸せを、クリスマスという幸せを。

これが、この幸せが、クリスマスの奇跡なのだから……。

## 最終章「わがまま」（後書き）

この度は、未熟な文章に最後までお付き合い頂いて有難う御座いました。

初めてということで、緊張もあり、度々ミスをしてしまい、申し訳ございませんでした。

えー、今回は、物語が2日間だったのでも書き上げたのも2日間でした。

少しベタになってしまったかも…と内心焦ったんですけどね（笑）楽しんで頂ければ、幸いです。

では、これからも機会があれば、書き続けていきたいと思いますので、応援の程、よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3406b/>

---

クリスマスの奇跡

2010年12月16日02時04分発行